

イースター島を目指してチリ/サンチャゴまで来たことは先に書いた。
そして早速、チリでいう JAL みたいな存在の、ランチリという航空会社へ行く。

イースター島へ行く往復チケットは 530US ドルという話を聞いていた。
15 万円でサンチャゴまで来て、さらにこの期に及んでその 6 万円の出費はとても痛いのだが、
それだけイースター島には引かれているのだ。絶海の孤島、イースター島ではあまり知られてい
ないが、ダイビングもできるらしい。ケアンズで使わなかった用具をそのまま持ってきていた。

実際にランチリのオフィスで聞くと、530US ドルというのは実は一番安いチケットで、
7 日前に予約する事
5 日以上、島に滞在する事
という条件が付いている事が判明。

そして確認してもらおうと、私の日程では、もはやその金額では無理という事らしい。
あと 1 日あれば、530 ドルのチケットで OK らしいのだが、日本からのデルタ航空のチケットは、
その安さゆえに、ガチガチに日程が決まっているのだった。

そして、私の条件では、最も安くて 800US ドル以上。そして島での滞在は 5 日。出発も 4 日後
と大分先だ。
イースター島までは、6 時間弱のフライトだから、行きと帰りの日は、ほとんど何も出来ない事
を考えると、実質は 3 日ということになる。
さすがに 3 日で 9 万円の出費というのは痛すぎる。
そして出発が 4 日後だと、とても中途半端で、南米に来たのに、他にはどこにも行けなくなるの
もつらい。

何でもイースター島の飛行場は、ランチリ所有のもので、チリ本土からは、ランチリしか飛んで
いないという。
結果として独占的な値段になってしまうようだった。
ここまで来ておいて、とても悩んだが諦める事にした

因みにイースター島へは、チリ本土からだけではなく、タヒチからも飛行機が飛んでいる。
イースター島へ行く旅行者のうち、日本およびオーストラリア、ニュージーランドの観光客はタ
ヒチから、アメリカ、ヨーロッパの観光客はチリ本土から行くケースが多いらしい。
この放浪を始める時には、そもそもそのルートを考えていたのだ。今回チリ本土経由を諦めたが、
いつかはタヒチ経由で行ってやる、そう思って諦めた。
余談ながら、アルゼンチンのテレビでは、タヒチがたいへんな事になっていると報道していた(と
思う)。スペイン語なので、全く分からないのだが、タヒチって、一皮むくとあんな国なのかとび
っくりである。

イースター島を泣く泣く諦めて、代わりにアルゼンチンのイグアスの滝とパタゴニアに行く事にした。

しばらくタヒチ経由ではもはや行けないかもしれない、果たしてイグアスの滝は、イースター島に負けただけのものを持っているのだろうか？

そんな思いでアルゼンチンのブエノスアイレスからイグアスまでの往復チケットを、ブエノスアイレスに到着早々、空港で確認したのだった。

ブエノスアイレス

あいにく今日、明日の便はなく、行きは2日後、帰りは4日後というフライトがある事がわかった。

これで確実にイグアスの滝を見る事が出来る。料金は600ペソ(21,000円)だ。安くはないが、イースター島に比べると安いもんだ。ホットした。

よし、と思い購入しようとする、後ろから抜群にきれいな白人金髪女性が、「パッケージにした方が良いわよ、ホテル分が安くなるわよ、市内に行って旅行代理店に行きなさい」というアドバイス。

ついつい、そのお得感と彼女の美貌に目が眩み、その場でチケットを買わなかったのだった。

これは天使の声なのか、悪魔の声なのか、実は後者である事をこの時点では知らない。

(因みにその彼女は、どこかへ行く飛行機のチケットをその場で買っていたのが不思議だ)

バスに乗り、40分掛けてブエノスアイレスの市内へ到着。一旦荷物をバス会社に預け、その足で旅行代理店へ。

ここで、何と空港からそこへ行くまでに、先ほどのイグアス行きのフライトが満席になってしまった事を知る。たったの40分なのに...

ちょっとした節約の為にえらい事になった。何の為にイースター島を諦めてブエノスにきたのかわかりゃーしない。

途方に暮れていると、旅行代理店ではバスにしろと言う。バスで18時間だそう。おえっ。

でも仕方なく、行きはバス、帰りは飛行機でアレンジしてもらおう。現地の宿2泊、現地のツアー1日がついて、しめて652ペソ(23,200円)。宿は3スターでそもそも安いので、全体としてあまり安くなったとは言えない気がする。バスが快適である事を祈るのみである。

まったく、よその国でも美人には要注意ってことだ。

バスの旅

南米は、鉄道よりもバスの方が発達していると聞いていたものの、ブエノスアイレスのバスターミナルへ行って見て驚いた。長さ1キロはあろうかというそのバスターミナルは、多くのバスと人でごった返している。

バスターミナルにはお土産やさんのみならず、電気屋さん、床屋さん、無数のレストランなどが

立ち並び、バス待ちの客を相手に商売していても活気がある。

旅行代理店の人から、出発の一時間前にバスターミナルに行ってね、と言われていたので、5時に行ってみたが、バスターミナルでは、「まだ1時間前だぜ、15分前で十分だよ」と言われてしまった。

待ちに待ったそのバスは、2階建てのゴージャスなやつだ。座席は3列になっていて、1つ1つの席はJALのビジネスクラスよりもゆったりしている。前の座席の背にセットされているシートを倒すと、自分の座席とつながり、そこに足を乗せることができる。そしてリクライニングを倒すと、飛行機のビジネスクラスよりも大きく倒れ、結果として180度に近くなるのだった。



巨大なバスターミナル。バスの多くは2階建て。赤いバスはサンパウロ行き。みんな荷物がすごい。

シートが180度になるのは、旅行代理店に聞いていた。ただ私は、水平に180度とイメージしていたのだが、実際には斜めに180度(に近い)仕組みだった。このイグアスツアーの代金652ペソ(23,200円)のうち、仮にバスの部分だけを取り出すと、100ペソ弱(3,000円ちょっと)とのことなので、これで十分だ。

この日は、朝から歩き回っていたので既に16時くらいから腹が減っていたのだが、夕食付きという事だったので食わずにいた。しかしなかなか出てこない。そして、これでもか、というくらい寒い。長袖もバスタオルもブエノスのホテルに預けてきてしまったのでTシャツを3枚着ることで凌ぐ私。それにしても妙なところで「飢えと寒さ」を体験するものだ。その内にどんどんと寒くなって、回りも皆、着き込み始めた。乗務員にはほとんど英語が通じないが、あまりの寒さに、「寒みーぜ、アミーゴ」と日本語で言ってみると分かってくれ、空調を緩めてくれた。シャレの通じるやつだ。

8時が過ぎ、すっかり日も暮れる。何故か社内の電気が消され、テレビだけがついている。これじゃあ本も読めない。つまらない映画に乘客達も飽きたようで、イスを全開に倒し、既に寝ている人が多い。

改めて確か旅行代理店では夕食付きと言っていたよな、と思い出しながらも、実は疑っていた。何と言っても教えてもらったバスターミナルの場所さえ間違っていたので…。もう寝るしかないと決め、持っていたワインをゴクリと飲み、胃をジンジンさせながら寝ていると、9時過ぎになってようやく夕食タイムとなる。南米ではこれが普通なのだろうか？そう言えば、有名どころのレストランでは営業開始が8時だったりする。

夕食のメインは鶏肉。飛行機のビジネスクラスほど豪華ではないが、エコノミーほど貧相でもない。そして飲み物はソフトドリンクかワインを選べるのが嬉しい。

バスは、アルゼンチン各地のバスターミナルを通過して、順調にイグアスを目指していた。翌日は、6時くらいから明るくなってきた。

世界に冠たる穀倉地帯なので、窓の外に広がる光景は、モンゴル草原の様に、どこまでも続く大地をイメージしていたのだが、実際には東南アジアの田舎という感じだ。

6時半に朝食が出る。このライブレポートを書く頃にはその内容を忘れてしまっているくらいに今度は貧相なものだった。パンとコーヒーだったような。

イグアスの街

イグアスのバスターミナルでは、HARANAKA と掛かれた紙を持った旅行代理店のスタッフが迎えに来ていた。早速、彼の車に乗り込み、出発。

しかし1分しない内に車が止る。何とホテルは、バスターミナルのすぐ近くだったのだ。車に乗るまでもない。

ホテルの部屋に入ると、遠くで砲撃の音がしているのに気が付いた。

イグアスはアルゼンチン、ブラジル、パラグアイ3国の国境の町である。

過去にブラジルとアルゼンチンが戦火を交えた事はない、と聞いていたので、とすると、パラグアイ軍か、などと思っていると、あれほど青く澄み渡っていた空が、にわかに灰色になり、ものすごい豪雨に。

「おおっ、久々にすごい雷」と思っていると、あっという間に停電に。

当然、外には出れず、テレビも照明もないので、本を読む為に窓に近づくと、「カキン、カキン」と、ライフルの玉が窓の格子に跳ね返っている。

やはりパラグアイ軍か、などと思う訳はないのだが、それは1センチ殻のヒョウだった。いろんなところにあたって跳ね返り、窓ガラスが割れるかと思うほど凄まじい。さすが南米、規模が違うぜ。

急に寒いほどひんやりし、辺り全体が夕方のように暗い。今日、イグアスの滝を見に行ったら人は、逃げ場がなくてたいへんだろうな。

いや、でも濡れるのを前提で行っているから平気か。いや、でもこのヒョウはなかなか痛いはず。

いや、それも貴重な南米体験だ、などと呑気にワインを飲んでいると、やはりバス旅の疲れからか、何時の間にか寝てしまうのだった。

イグアスの滝へ

翌朝に、約束通り9時20分丁度にツアーの迎いが来た。東南アジア辺りでは、こうしたツアーで時間が正確であったためしがない。

南米だしな、と思っていたのとは裏腹に、ブエノスアイレスでもそうだったのだが、アルゼンチ

ン人の時間の正確なこと。かなり好感を持てる。

送迎のミニバスには既に乗客が 20 人程度乗っていた。

バスは 20 分くらいでイグアス国立公園に着く。ここで 30 ペソ(1,070 円)支払う。どうもこれは外国人料金のようなのだ。

国立公園内の移動は、トロッコ列車である。

何でも環境に配慮して最近出来たらしい。

5 輛編成で 250～300 人乗り。スピードは 10 キロ程度なので、遊園地の乗りものみたいだ。

しかし実に趣があるのだった。のんびりと走る列車のそよ風、青い空、実に映える木々の緑が実に気持ちが良い。

みんな童心にかえったようにウキウキしている。

10 分ほど走ると、遠くに湯気のように立ち上る白い雲が見える。どうやらあれが滝壺のようなのだ。



いつも晴れているせいか、オープン型のトロッコ列車。この日は満席だった。

イグアスの滝は、滝幅は 4 キロ、最大落差は 80 メートルとガイドブックに書いてある。滝幅 4 キロというのは、実際にはとところどころ切れていて、連続している訳ではない。結果として大小 300 近くの滝の群れとなっている。

その中で、最大級のものが、“悪魔ののどぶえ”と呼ばれる場所で、トロッコで二駅目の終点で降りてから、15 分ほど遊歩道を行った場所にある。

憎いことに、この遊歩道、イグアスの滝につながる上流の川の上を歩く様に出来ている。

それほど深い川ではないのだが、川幅はものすごく広く、流れも滝に近いゆえに遅くなく、膨大な水量であることは十分にわかる。

何でもイグアスの滝は、毎秒 6 万 5000 トンの水量だそうだ。

悪魔ののどぶえ

このコースは、往復することになるのだが、帰ってくる人が皆、興奮した様子だ。

さすがに世界に冠たるイグアスの滝である。



イグアスの滝で最も有名な“悪魔ののどぶえ”と呼ばれるスポットへ向かう遊歩道。川には魚の姿も。

うなるような音が近づいてくる。

ふと見ると、遊歩道のジャングルツアーという感じだったのが突然開け、今までゆったり流れていた川が、突然落ち込んでいるのが見えた。

そしてさらに近づくと、“悪魔ののどぶえ”の全体が姿を現わす。

絶え間ない光と音、そして重厚な振動、大自然が作り出したそのシンフォニーは...、と書き進めるところだが、文才がなくて陳腐になりそうなので、文字で表現するのはやめて、写真に語ってもらうことにしたい。



滝を上から見る機会は、日本ではあまりないような気がする。でかい川が突然切れている感じ。



このライブレポートの写真や、購入した絵葉書などを送る時に、実は少し躊躇していることがある。その場所をこれから旅しようとしている人にとって感動が薄まってしまふことを危惧するからだ。

ただ、特にこのイグアスは、目の前に来て始めてその壮大さが分かると思うのでちっとも躊躇することなく送ることができる。

それほど凄い創造物で、“地球に乾杯”って思いを強くする。

滝の間近かへ

再び鉄道に乗り一駅戻る。

みどころは“悪魔ののどぶえ”だけではない。もっと間近でみるスポットへ移動する。

上流の川は、まず“悪魔ののどぶえ”に落ちようとするが、その水量が膨大であるがゆえに、さらに外側へと回り、ようやく滝壺に落ちるのだ。今度はその様子。

“悪魔ののどぶえ”程ではないが、大量の水が落ちる上と下のポイントへ。



滝の上部はとてものどかだ。
鳥が魚をついばんでいたりする。

一転、下の方はすさまじい。水飛沫も凄い。
観光客の中には、既に水着に着替えている人もいて、天然のシャワーを楽しんでいた。

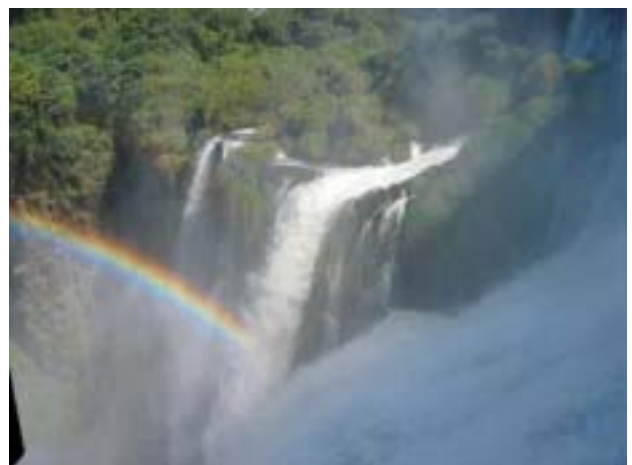


その膨大な水飛沫のお陰で、ここでは常に虹を見る事が出来る。
強い日差しにたっぷりの水蒸気のお陰でその虹の色の濃いこと！

そして虹は二重にも三重にもなって見えることがあるのだった。

間近かで、滝を見ているとなんだかふらふらと吸い込まれそうになる。

一方、虹を見ていると、手が届きそうでつい乗り出したくなる。
ツアーでなければ、1日中ここでのんびりしたいところだった。



このツアーは、スペイン語で行われるもので、20名弱がスペイン人観光客だ。アルゼンチン人のガイドから何か説明を受けて、全員が手を挙げている。

どうも滝からエネルギーを貰うのだそうだ。スペイン人の真剣さがちょっと恐いくらいだ。



実は、私は50ペソ(1783円)余計に払い、英語が話せる通訳をつけてもらっていた。てっきり非スペイン語は自分一人と思っていると、実はアメリカ人の老夫婦とベトナム人二人が一緒だった。そして通訳はブラジル人の女性だ。

我々エスニックマイノリティは、スペイン人達にくっついていながら、ブラジル人ガイドを中心に、いつもその7人で行動し、いろいろな話をした。イラク戦争の話は出たが、さすがにベトナム戦争の話はなかったが...

このイグアスの滝、ブラジルサイドからの景色も凄いらしい。ブラジルに入るにはビザが必要だが、ガイドブックのサイドインフォメーションでは、タクシーをチャーターすれば、アルゼンチンからブラジルへビザのチェック無しに入れてしまうようなことが書いてある。イリーガルという事もさる事ながら、あまりに一度に感動してしまっはもったいない、いつかまた来ようと思ったので私は参加しないことにした。

同時に、わずか70ペソ(2500円)というボードでの滝壺ツアーも止めた。それまでにもう十分水飛沫を浴び堪能できていたので、やはりこれ以上の感動は、何だかバチがあたりそうな気がしたからだ。

一緒に歩いていたベトナム人も同じ気持ちでポートツアーには参加しなかった。彼ら曰く、「もう、ポートピープルは十分だよ」とジョークを飛ばしたのは、腹を抱えて笑ってしまう。一方ふと見ると、一緒にいたアメリカ人はそのジョークに、笑うに笑えず、苦が苦がした様子だったのは、笑いながらも、変なところで国際社会を垣間見た気がする。

このベトナム人二人、若い頃の同級生らしい。

一人はオーストラリアに移住し、医師になっていて、もう一人は本国ホーチミンで銀行に勤めている。

二人とも3週間の休暇を取り、マレーシア/クアラルンプールで落ち合い、マレーシア航空で、クアラルンプール～南ア/ケープタウン～プエノスアイレスとやってきたらしい。そのルートが一番安く南米に来れるらしく、1800ドルということだった。

日本人の夏休みが、平均的には9日前後と言うと、このベトナム人をもってして驚かれてしまった。

二人ともベトナム人としては相当エリートながらも、世界の最貧民と言われるベトナム人が、やはり地球の裏側の南米へこのように旅しているというのは隔世の感がある。

イグアスの街へ

滝を離れて、ツアーバスは街中のあるスポットへ出かけた。写真の場所である。

この写真、ただの川の写真の様だが、実はここには、アルゼンチン(手前)、ブラジル(右)、パラグアイ(左)の3ヶ国が映っているものなのだ。



アルゼンチン、ブラジル、パラグアイの交差点。それぞれの土地に、記念碑の様なもの立っていて、お互いに見える。

2つの川によって3ヶ国に分かれている場所なのである。この水はやがてブエノスアイレスまで流れ、やがて大西洋へと注がれる。。

この3つの国の国民はそれぞれの国に自由に訪れることができるという。

アルゼンチンペソの暴落により、国の豊かさは、ブラジル アルゼンチン パラグアイという順になっただけらしい。そう、アルゼンチンペソが暴落しても、パラグアイはいつも貧しい国なのだった。

ツアーが終わった後に、夕食へ出かけた。ここは内陸部なのだが、イグアスの滝のお陰で、川魚が豊富な場所らしい。その川魚を頼ってみた。まあ、ごく普通にある白身魚のフライという感じで、はっきり言うとステーキの方がうまいと思うが、その量は凄い。

誰がこんなに食べるんだ、というほどの白身のフライが出てくるのだった。しかもそれが2枚。1枚は何とか食べたが、2枚目はさすがに食べきれなかった。

アルゼンチン人はそれほど体が大きくない。私の方がでかいくらいだ(残念ながら)。一体、こんなに大量に出してどうやって食べているのかいつも不思議でしょうがない。

たぶんつづく